

NHKドラマ「チャレンジド」による 学生の教師像についての一考察

A Consideration of the Teacher's Image of Students in the NHK Drama, "Challenged"

横井 一之*
Kazuyuki YOKOI

平成22年度前期「特別活動指導法」の授業で、一昨年度NHKで放映された土曜ドラマ「フルスイング」と昨年度NHKで放映された土曜ドラマ「チャレンジド」を視聴した。視聴した学生は3年生1名であったが、その学生が課題として、他大学教育系1年生100余名が視聴し、チャレンジドの主人公塙先生の教師像について記述したアンケートをまとめた。担当教師として、塙先生を教育者として分析し、本講義の教材としての妥当性を検討したい。

まず、第1章では山本有三、間瀬正次、斎藤喜博、近藤益雄、須永博士、石山茂利夫、河上亮一、水谷 修、高島導宏の教育観についてまとめる。第2章では、チャレンジドの主人公塙啓一郎の教師像について、前述した教育系1年生100余名が記述したアンケートを元に筆者があらためてまとめた。第3章では、教師を目指す学生が「チャレンジド」を本授業で視聴する意義をあらためて問いたい。

1. 先達の教師像

(1) 山本有三の教師論

山本有三はその作品¹⁾の中で校長をして教育論を展開している。「修身の時間に、どれだけ立派な話をしても、一度世間に出ると、すぐそれはたたきこわされてしまう。……(中略)」と言い寄る新任教師行介に、人をボウフラにたとえ、貧困による負のスパイラルをどぶ水にたとえる。校長は「いや、それは教育に力がないんじゃない。生活の方が、学校なんかより、ずっと痛烈だと言うだけだ」と論ず。さらに、「待ちたまえ、君。どぶをそうじするには、ジョレンを入れて、おおごみをしゃくりあげたり、詰まって

* 本学非常勤講師、東海学園大学、特別活動指導法 (Method of special activities)

いるのを棒で突っ突き出したり、しみずを流しこんだり、いろいろな方法があると思う。

(中略)」と方法論を示し、この中から教師のとる方法として「何が起ころうと、われわれはしみずを送ること、それを専一につとめるべきだ。それが教育者の任務だ。」と言い切る。

理想を示しつつ、ときに子どもを見守り、たとえ 1mm でもいいので後退することなく常に前進することを考える。わずかでよいので、必ず前進するのが教師の任務だと言う。

教育は生活より弱い現実的営みなので、ときに思うように進まないことは多々ある。そういうときに、決してあきらめず、ねばり強く子どもとかかわっていくということだ。

(2) 望まれる教師像

間瀬正次は昭和 53 年度に全国連合退職校長会がまとめたものとして、「あなたから見たよい先生」²⁾として次の 10 項目をあげている。

- ①教育者としての使命感に徹した先生
- ②教育専門職として豊かな教職的教養をもち、すぐれた教育技術を身につけた先生
- ③豊かな人間性をもつ先生
- ④子ども・父母から信頼される先生
- ⑤心身の健康な先生
- ⑥是非善悪を明らかにし、寛厳の調和のとれた先生
- ⑦広い教養のある先生
- ⑧郷土愛に燃え、国家に対し愛情をもつ先生
- ⑨教師としての身だしなみに心がけ、良識的な言動をする先生
- ⑩組合員としての立場と、教師としての使命の区別ができる先生

以上を「教育に打ちこみ、教育の仕事に生き甲斐を感じ、すぐれた教職者としての教養と技術を身につけている先生を望んでいる。よく子どもを理解し、子どもの個性を生かし、子どもからはもちろん父母からも信頼される先生でなければならず、その根底として、豊かな人間性、人間味にみちた先生を希望している」と要約している。

(3) 斎藤喜博の教育

斎藤喜博は「小中学校の教師を経て、戦後は民主主義教育の指導者として組合活動にも携わり、推されて群馬県教組の文化部長にもなった。1952 年に 41 歳で群馬県南端の利根川を挟んで本校と分校に分かれていた佐波郡島村の島小学校(現・伊勢崎市立境島小学校)という小さな学校の校長となり、11 年間、「島小教育」の名で教育史に残る実践を展開した。その後、近隣の境町立境東小学校で 1 年、町で最も大きな境小学校(現・伊勢崎市立境小学校)で 5 年間校長を務めて実践を発展させ、1969 年に 59 歳で定年退職した。島小時代には毎年授業と行事(合唱、体育発表、野外劇等)を中心とした公開研究会を開き、計 8 回の公開研に全国から 1 万人近い教師、研究者が参加した。」³⁾と説明がある。

斎藤は「驚くことのできる教師」⁴⁾という項目で「私は、教師の悪口ばかり書いてきた。しかし私も教師であるので、教師を軽蔑しているつもりは少しもない。それどころか、日本のいまのあらゆる職業のなかで、教師ぐらい悪い条件のなかで、また報われることの乏しい仕事のなかで、やってもやってもつきないような仕事に、ばかばかしいほどの真面目な努力をしているものは他にないのではないかとさえ思っている。

夏や冬の休暇に、各地の研究会に出てみても、自費をつかって集まった人たちが、夜まで夢中になって話し合い、勉強し合っている。全国各地から、何千円という金をかけ、往復とも夜汽車に乗り続けて、島小へ集まることも、何だかんだといったところで、伊達や酔興でできることではない。しかもそういう努力をする教師の仕事は、ほんとうに、波打際に積み上げる砂のように、積んでも積んでもくずされていくようなはかないものである。

そういうはない仕事に全力をあげている教師を私は尊敬する。もし、そういう教師のばかばかしいほどの努力がなかったら、いまのような社会のなかでは、日本の子どもはみな不良化しているかもしれない。それを少しでも喰いとめているのは、……（以下略）」と述べている。

(4) 近藤益雄の実践－近藤原理（御子息）へ－

知的障害児教育・指導に一生をささげられた近藤益雄氏が当時精神薄弱児教育と呼ばれていた教育に携わる者に大切な気質として唱えられたのが「のんき・こんき・げんき」である。氏の著作⁵⁾によると次のようである。

① 「自信がないので」ということについて

私の学校には、ふたつの特殊学級（特別支援学級）があるが、その一方の学級担任が、来年度はやめそうなので、その後を誰かにたのんでやってもらわなくてはならぬことになった。そこで、私は校長が任命するまえに、適当な人物を、この学校の中からさがそうとおもい、4人の先生にあたってみた。ところが、そのうちの一人だけは、「自分は短気だから適当でない」という。はっきりした理由でことわった。

② 「のんき」について

「のんき」は、精薄児教育（知的障害児教育）にたずさわるものの美德である。自信は、のんきにかまえて仕事ができるものにだけ、そだっていくだろう。

③ 「こんき」について

精薄児教育（知的障害児教育）は、はた目には、どうも「こんき教育」のようにみえるらしい。だから「よく根気がつづきますね」と感心してくれる人がおおい。

④ 「げんき」について

生々した言葉や動作は、この子どもたちに快い刺激をあたえる。それは担任当初にも必要だし、途中で挫折しそうになるときには、いっそう必要なものである。紙数がないので、くわしくかけないが、とにかく「げんき」もまた、すばらしい美德だと、

教師たるものはすべておもわなければならない。精薄児（知的障害児）の教師の場合、それは子どもたちの心身両面への良薬でもあるから。

（５）須永博士⁶⁾が見た教師

アミロイドーシスに罹患した崎坂祐司先生。それを取り上げた須永博士（すながひろし）は「こころ」という寸評で次のように表している。

「他人には親切にしろよ。あなたの親切いらない、と言われるまで親切にしろ。」と先生（崎坂先生）はしっかり言います。先生は、自分のことよりも他人のことを考えます。たくさんの人に何かしてあげることが先生の生きがいのように思えます。

先生は、勉強よりもっと大切な事があることを教えてくれました。勉強ができなければ、自分の願っている高校にも行けないし、なりたい職業にもつけない。でも、こんな大切な勉強よりも、もっともっと生きていくために大切なものは、“人間の心”。先生は数学よりも学んでほしいと願っているのじゃないかと思えます。

また、部活という次のような寸評も表している。

朝、出勤される先生を入り口で待っている人たちがいます。野球部の生徒を中心とした男の子たちです。先生の荷物を持ちたり、手を貸したり、体を支えたりして二階の職員室まで先生を助けようという男の子たちです。

私たちにたえず、勇気や夢を持たせ希望を与えてくれる先生のために、何かしてあげたい、力になりたいという小さな思いやりを態度でこたえている男子生徒たちです。

残念ながら、私が中学校で教師だったころは、教師も生徒も幸いにしてみんな元気で、いがみ合うまではいかないまでも、決してこのような生徒本来の優しさを引き出す教育はできていなかったように覚えている。

（６）石山茂利夫⁷⁾の警告

校内暴力の忠生中学校を再生させて昭和 60 年の教育者表彰を受けた長谷川先生、そして同じ忠生中学校で生徒の挑発におびえ、果物ナイフで生徒を刺した英語教師 Y を対照的に取り扱っている。と同時に両名を同じ穴の貉としてとらえ、教師という職業を冷静に分析している。

（７）河上亮一のプロ教師論

プロ教師の生き方⁸⁾の前書きで、河上は「文部省を学校の教育力の後退と子どもの危機をほぼ正確にとらえていたと言っていい。第三の教育改革はそのためにだまされたものである。しかし残念ながら、改革は壮大な絵空事に終わるだろう。それは文部省が、これまでの保守・現実派の姿勢を 180 度転換し、革新・理念派に変身したからである。『一人一人の個性を大切にす教育』『やる気を第一にする教育』『ほめる教育』『教師は教授者から援助者へ』という改革が、今、猛烈に現場を変えつつある。しかし、このような理念は、生徒にあっては、好きなことは何やってもいいという形であらわれており、教師は、

生徒が言うことをきかないとき、黙って一步さがるしかないという状況になっている。体罰はおろか叱ることさえままならぬ状況に追い込まれてしまったのである。ここにおいて、文部省、日教組、マスコミという理念派大連合が成立し、私たち現実派の教師は完全に孤立してしまったと言っている。

このような状況をつくりだした責任の一端は、もちろん、現場の教師にもある。この十年、私たちは、マスコミを中心とした、自由・人権、平等第一の理念による学校たたきに対し、教育の理論で対抗することができなかった。(中略) 実は、戦術を誤ったのである。現場の教師は、現場の状況と、その状況から考えたことだけを率直に、世間の人たちに伝えればよかったのである。正義を主張しようなどという大それた考えにとらわれていたから負けたのである。」と述べている。

(8) 夜回り先生の教育観

水谷修こと夜回り先生は、「あした笑顔になあれ」¹⁰⁾の巻頭で「また、いま苦しんでいるのは、子どもたちだけではないこともわかりました。数限りない親たちから、子どもの非行、薬物乱用、リストカット、引きこもりなど、さまざまな相談が私のもとに届きました。こころ優しい親ほど、子どもの問題を一人で抱え込み、だれにも頼ることができず、自分を責め、暗い夜の部屋で苦しんでいました。多くの親たちが、いや日本のほとんどの親たちが、いま子どもたちを見失っています。親は、子育ての素人です。一人目の子ではじめて子育てに挑戦し、二人目でもたかだか二度目です。しかし、親たちは子どもをもつと、すべて自分できちんとしなくてはならないと抱え込み、子育てに失敗すると、自分を責めています。この本は、そんな悩み苦しむ親たちへの、そして、いま子育て真っ最中の親たちへの、さらに、これから親になる人たちへの、私からの子育て論でもあります。

私が、すべての子どもたちに求めるのは、学力や学歴、あるいは地位や名誉ではありません。簡単です、目を輝かせたあの笑顔です。(後略)」と述べている。

(9) 高島導宏の教育論

「甲子園への遺言」¹¹⁾の裏表紙にある解説によると「天才バッティングコーチ高島導宏の生涯を描いた傑作。小久保裕紀、田口壮などの一流プロ野球選手を育てあげた彼は高校教師となり、高校野球の監督として甲子園での全国制覇を目指す。ところが、突然発覚した病気のために……。」とある。

NHK 土曜ドラマでの主人公名は高林先生。ドラマは6回シリーズであるが、毎回展開される話題をまとめたような名言が付け加えられる。

具体的には、①夢を投げ出さない。夢はそれをもつ人を強くする。迷ったときに道を照らしてくれる。②才能とは逃げ出さないこと。プロのコーチの仕事は教えないこと。親みたいな教師ではいけませんか。③野球はいろいろな事を教えてくれた。野球に恩返しをしたい。④(心の)キャッチボール、⑤厳しさと激しさの中で人は伸びる、⑥気力、などで

ある。

2. 大学生の見た塙啓一郎先生

本授業で視聴した塙啓一郎先生が主人公である同じチャレンジドという番組を、名古屋市T区T大学教育系1年生学生101名が視聴した。そして、平成22年6月に「将来教師に就くにあたり、参考となった場面を示しなさい」というアンケートに対して、各学生が3つずつ記述した。前述したように、このアンケート調査をもとに受講学生が、チャレンジドにおける教師像をレポートとしてまとめた。ここでは、筆者がそのレポートを含めて、アンケート調査を見直し、まとめなおした。それが表1である。

表1 今後教師に就くにあたり、チャレンジドから参考になったこと

番号	参考となった場面	延べ人数
1	川に流れた答案を夜遅く探し、それについて生徒に詫びた。(大切なのは得点のみか)	49
2	生徒のいじめでねじれた心を打開するためにマラソンに参加した。	37
3	生徒がいじめで死のうとしたときに、身を挺して止めた。	19
4	目が見えないので、生徒の声をすべて覚えた。	13
5	親の都合で転校することとなった生徒を親身に止めた。	13
6	生徒にきちんと気持ちをぶつける。	9
7	いじめで死のうとした生徒を、助けて、抱きしめてあげた。	8
8	問題のある生徒と、マラソンしながら語る。	8
9	まちがったときは、生徒にきちんと謝る。	8
10	障害を乗り越えて教育にのぞんでいる。	7
11	障害者はチャレンジドできると神様に選ばれた人という話。	7
12	謹慎中に、いじめについて子どもたちに手紙を書いた。	7
13	生徒のためなら何でもできる。	7

3. 考察

最も多くの学生が「教師に就くにあたりチャレンジドから参考となったこと」として「川に流れた答案を夜遅く探し、それについて生徒に詫びた」ことをあげている。採点後に、誤って自転車が転倒したときに答案用紙を5, 6枚川に流してしまった副担任が「大事なものを失えてしまい、申し訳ありませんでした。しかし、点数は全部記録してありますから大丈夫です」と言ったのに対して、塙先生は「先生は試験を結果さえ分かればよいと考えていたのですか。答案用紙は生徒から教師への通知表です。1枚1枚に生徒が書いた文

字のあとから、その生徒がどのように考えたのか、どのように解こうとしたのかが分かります」と叱咤する。そこで、夜分にかかわらず、下流の河原へ探しに行く。そして、翌日答案用紙をなくしたことを素直に生徒に詫びた。学生は、教師が生徒のために全力で活躍する姿、そして間違いをきちんと生徒に詫びる潔さに感銘したと思う。このことは、1節（7）で河上亮一氏が指摘した「現場の教師は、現場の状況と、その状況から考えたことだけを率直に、世間の人たちに伝えればよかったのである。正義を主張しようなどという大それた考えにとらわれていたから負けたのである」に通じるところである。教師があれこれ画策して逆に失敗することをよく目にする。ある意味で「塙先生は目が見えないから仕方がない」と生徒にきちんと悟らせることが大切である。自分が塙先生だとしてもそうなのだろうという生徒の中の悟り、受容、共感が必要である。何事も中途半端は危険である。

学生が次に参考になるとしたのは「生徒のいじめでねじれた心を打開するためにマラソンに参加した」ことで、いじめた生徒が「強い者が弱い者をいじめて何が悪いのか」と居直り不登校状態となった。その状況を打開するために塙先生はその生徒に「僕が市民マラソンを走り抜くことができたなら、僕の勝ちだ。おまえは学校へ出てこい」と約束というか賭けをしたことである。論理的にはすっきりしない話のやりとりだが、思春期の中学生には効果が十分にある方法だと思った。3分の1の学生がよい方法と考えているので、実際の教師はあまり理屈にとらわれず、生徒から知恵というか考えを聞くことも大切だと思う。

学生が参考になるとした3番目は「生徒がいじめで死のうとしたときに、身を挺して止めた」ことである。修学旅行中の登山で、下山前に該当生徒は友人にメモを託して、旅行中も続きたいじめのために、混乱して死ぬつもりで逃亡した。塙先生はそのことを知ると、その生徒が行ったであろう方向へ、副担任の助けを受けて急行する。そして、崖っぷちに立つ生徒を見つけると、危険な場所であることを気にもかけず駆け寄り助けた。見方によっては、無鉄砲だが、生徒を第一に思う行動を生徒は支持した。

このことは1節（3）で斎藤喜博が「もし、そういう教師のばかばかしいほどの努力がなかったら、いまのような社会のなかでは、日本の子どもはみな不良化しているかもしれない」と述べているように、生徒のために常に努力するのは教師の美德である。このことを、1節（8）夜回り先生こと水谷修さんは「生きている限り、君たちのために働きます」と断言する。苦しんでいる子どもにとって、何と頼もしい言葉だろうか。同じ教師が冷静に見ると、すべての苦しんでいる子どもに夜回り先生一人で対応するのは不可能かのよう思う。しかし、水谷修さんのことばは本当に苦しんでいる子どもの心にしみ込むものである。心を動かす言葉は理屈ではなく、心のこもった言葉である。

第4番目、第5番目は13人の学生が支持している「目が見えないので、生徒の声をすべて覚えた」と「親の都合で転校することとなった生徒を親身に止めた」ことである。

目が見えないから見えたとか、聞こえたということをよく耳にする。1節(5)で須永博士さんが紹介した崎坂祐司先生は筋肉が動かなくなっていく病気で、教師ができるのが不思議なぐらいである。それなのに、というかそれだから、「先生が体が動きにくいにもかかわらず、生徒のために動く姿を見せることにより」、生徒が自分たちから活動しなければならぬという自立心に火を点けたのだ。必ずしも、力強い言葉、力強い動きが生徒を動かすわけではない。逆の表現すれば、かすかな言葉、行動でも生徒に力強く働きかけることは可能だということである。

第5番目の「転校することとなった生徒を親身に止めた」のは、家庭内暴力で親子関係が安定しない男子生徒、しかも母親はPTA会長であるが、その生徒が親の学校との確執により、転校しようとしたときの話である。当の生徒は親の離婚話もあり、精神状態がおだやかではなかった。その状況を理解し、正しいと思う方法を生徒に強く訴えた。周りからわあわあ言うのではなく、その生徒自身の心に訴えかけて、生徒を強くしていった。1節(2)に間瀬正次が全国退職校長会がまとめたものとして、⑩に「広い教養のある先生」とあげている。教師は広い教養をもち、生徒自身やその家族の現在の状態を冷静に判断して対処することが大切である。

さて、筆者が長時間いる教育現場は保育所である。池田¹³⁾は保育者や教師のモデルとして「せんせい」¹⁴⁾という絵本を取り上げている。それによると、先生は、①ときどき、うま、②ときどき、オニ、③ときどき、おすもうさん、④ときどき、おおかみ、⑤ときどき、おきやくさん、⑥ときどき、かngoふさん(かngoしさん)、⑦ときどき、おとうさん、⑧おかあさん、⑨ほんとうの、おかあさん(だよ)、⑩こども、⑪ほんとうのこども(だよ)、⑫こぶたのせんせい(だよ)、⑬そして、わたしたちのせんせい、とまとめる。教師は役者でなければ務まらない。

また、筆者がかつての養護学校(現特別支援学校)に初めて勤務したときにであった教師像が、1節(4)近藤益雄先生の唱える「のんき・こんき・げんき」である。確かに埴先生はげんきで、こんきが良いのみでなく、のんきを兼ね備えている。のんきさ故に、近視眼的に、打算的な行動をしない。素敵な先生である。

チャレンジドの埴先生のモデルとなった教師について以下に述べる。

表2 新井淑則さんについて(奥山郁郎さんの書評より)

埼玉県長瀬町立長瀬中の教壇に立って3年目を迎えた全盲の教師、新井淑則(よしのり)さん(48)の半生が、主婦向けの漫画月刊誌「フォアミセス」(秋田書店)の2010年6月号に掲載された。新井さんは、今春から2年生の国語担当になり、盲導犬マーリンと一緒に、元気に学校生活を送っている。漫画化について、新井さんは「私の反省を妻の視点も入れて丁寧に描いてもらった。同じ境遇の人たちの役に立てば、うれしい」と話している。

新井さんの実話¹²⁾が、主婦向けの漫画月刊誌に高見さちこさんの手により載ったという

ことだ。障害を持った方の自叙伝や著書が多くの人に感銘をあたえた例として、中村久子、星野富弘、乙武洋匡各氏がいるが、自分で苦労した本当の話なので多くの人の共感を得ると思う。

一方、同じ視覚障害者で2010年7月の参議院選挙に静岡県選挙区から立候補した河合純一氏も「夢 追いかけて」⁹⁾という著書を著している。

平成20年告示の中学校学習指導要領¹⁵⁾によると、特別活動の目標は「望ましい集団生活を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方について自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」である。

この目標に照らしてチャレンジドという番組と主人公の塙先生を評価してみたい。番組の中では、表1から①テスト、テストの意義、②いじめ、いじめられた者の心の痛み、いじめ者の弱さ、その解決法、③視覚障害なら音を使うなど、教育方法論、④生徒との向かい方、⑤教師としての姿勢等が示されていることがわかる。

上記、①～⑤はすべて特別活動の目標に合致しており、教師の話だけではなかなかイメージ化できない学校での様子を、本番組は、具体的に示すよい教材になっているといえる。また、塙先生が着任式の挨拶でも述べているように「私は目が見えません。でも、気合いと体力と根性でみなさんと接するつもりです」という言葉どおりに、全力で生徒と関わっている。塙先生は「自分の生き方をさらけ出して、塙啓一郎という生の人間の生き方を生徒に示している」と思う。

最後に、番組の中では視覚障害者用の補助機器が多く登場する。ICレコーダー、点字、盲導犬、音声付き携帯電話等である。これらの機器の啓発でも、この番組は役立っている。バリアフリーや統合教育が叫ばれて久しいが、効率を重んじるために、障害児と健常児の区別教育により、なかなか障害者（児）理解が進んでいないのは事実である。この点からも大きな意味のある番組である。もちろん、障害者理解も「人間としての生き方について自覚を深める」ことへつながる。

以上のように、チャレンジドは特別活動指導法の教材として適しているといえる。

参考文献

- 1) 山本有三・波一妻編一・新潮社日本文学全集・1971
- 2) 間瀬正次・望ましい教師への道－学生から教師へ－・第一法規・1974
- 3) Wikipedia「斎藤喜博」
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%8E%E8%97%A4%E5%96%9C%E5%8D%9A>
- 4) 斎藤喜博・斎藤喜博全集7－私の教師論－・国土社・1975
- 5) 近藤益雄・近藤益雄著作集5－のんき・こんき・げんき－・1975

- 6) 須永博士・教壇・七賢出版・1992
- 7) 石山茂利夫・中学校教師―現場で何が起きているか―・講談社文庫・1995
- 8) 河上亮一・プロ教師の生き方・洋泉社・1996
- 9) 河合純一・夢 追いかけて・ひくまの出版・2000
- 10) 水谷 修・あした天気になあれ―夜回り先生の子育て論―・日本評論社・2006
- 11) 門田隆将・甲子園への遺言―伝説の打撃コーチ高島導宏の生涯―・講談社文庫・2008
- 12) 新井淑則・全盲先生、泣いて笑っていっぱい生きる・マガジンハウス・2009
- 13) 池田邦子・先生って、どんな人?―保育者・大場牧夫の絵本『せんせい』を学生向けの教材として読み解く―・奈良文化女子短期大学紀要・2009
- 14) 大場牧夫・せんせい・福音館書店・1992
- 15) 文部科学省・中学校学習指導要領・東山書房・2008